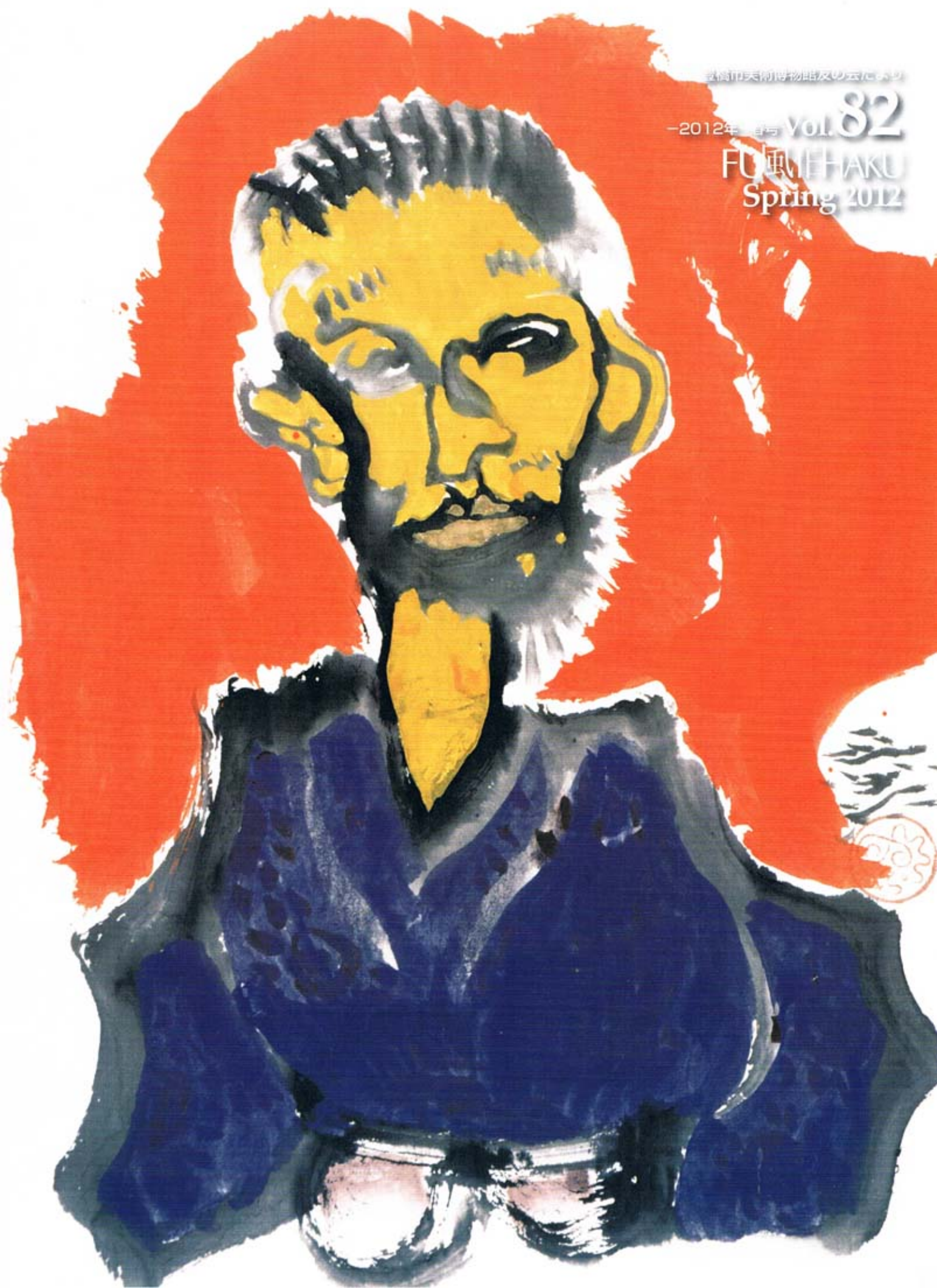


富岡市美術館 富岡市美術館友の会 だより

—2012年— 春号 Vol. 82

FUJIKAWA
Spring 2012



「現代美術展 in とよはし」に想う

鴨長明の『方丈記』にはこんな一節がある。「ことを知り、世を知れば、願わず、走らず。ただ、静かなるを望みとし、愁へ無きを楽しみとす」。しかし「愁いのないことだけを楽しみにしている」、この言葉のとおりには生きたくない。

未来に希望があるのかわからない、いつ何が起きるかわからない。だからこそ確かに生きるための力が欲しい。何とその力を与えてくれるのか。アートにその力はあるのか。「現代美術展 in とよはし」の現代美術作品を観ることで、何を感じたのか5人の人に聞きました。

幻想的な生命のエネルギー

増田洋美 「PLAY THE GLASS」

豊橋東高校2年 中神勇輝

私が、特に印象に残った作品は、豊橋市公会堂前の増田洋美さんのガラスのインスタレーション「PLAY THE GLASS」2作品です。

公会堂前の広場スペースに置かれてあった「soave—かげろう」は、新聞でも写真付きで取り上げられていて、「水色が映えて、とてもきれいな作品だなあ」と、私は見に行く前から思っていました。

実際に見に行ってみると、まるで、植物が暗所から輝いて発芽するような、あるいは湖水と同化した水鳥のような、幻想的で命のエネルギーに満ちあふれた形がそこにあり、とても感動しました。

また「allegrement—楽しく」は、公会堂の大階段の上に展示してあり、階段のごつごつした感触と、ガラスのつるつるした感触が対照的で、まるで朽木や土から生え

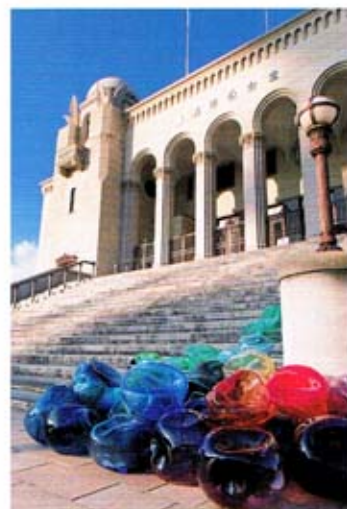
出たキノコや植物のように感じました。

そう思うと、「いったいこれらのものは、どうやって生まれたのだろうか」という考えが止まらなくなりました——公

会堂の壁から湧き出て降ってきたのだろうか。それとも、卵や種子のように、一つずつ産み落とされたのだろうか。はたまた、地面から湧いて出てきたのだろうか。

ずっと考えていると、私は、この作品がますます面白いものに感じられました。

また、こういう展示会があるといいなと思っています。



「空の箱」から泥棒する

山本昌男 「ナカゾラ、そして、川」

ふれでい—山崎

ここに一冊の写真展の図録がある。最後のページには「山本昌男」のサインが……。

20年ほど前、写真にのめり込んでいた。カラー作品を市民展などに出品したり、個展を開いたりしていたが、10年ほどたった頃から自分の作品に満足がいなくなり、スランプに陥る。なんとしてもシャッターを押すことが出来ない。写真とは何か。写真表現の本質とは何か……毎日考えていた。

そして、(もうだめだ。写真はやめよう……)と思う。そんな時、散歩の途中になにげなくギャラリーサンセリテをのぞく。驚愕する！

「A box of Ku (空の箱)」と言うタイトルの写真展であったが、広いギャラリーの壁一面に小さな小さなモノクロームの写真が張り付いていた。

印画紙は傷がついていたり、隅が破れていたり、折れていたり……。 (ナンダコレハ！スゴイ！) 夢の中の心地でギャラリーの中を時間が無くなったがごとく浮遊する。



(コレダ、コレダ、コレダ……)私の探していた写真表現について出会える。佐々木豊の『泥棒美術学校』を読んだところであったので……(よし、これを盗もう)と。

単旋律を記す楽譜のように

味岡伸太郎「Straight line あるいは線庭」

桜丘高校音楽科2年 小坂日菜子

私はしばしば元気をもらいたい時やリラックスしたい時に、CDや演奏会で音楽を聴くことがある。ドビュッシーの輝くような音や、せせらぎのように流れるチャイコフスキーのメロディは、自然と私に“力”を与えてくれるような気がする。

私はこの作品を観たとき、それらと同じような感覚を覚えた。

豊橋市美術博物館の中を突っ切るように並べられた石の直線は、まるで単旋律を記す楽譜のようにも見えた。ぶれることなく、ただ真っ直ぐに並ぶ石。しかし、その石の中にひとつとして同じものはなかった。

以前、こんな話を聞いたことがある。

「音を演奏するだけでは“音楽”ではない。一つひとつの音符にそれぞれの思いがある。そのそれぞれ違う音符たちを、ひとつのフレーズにできたとき初めて“音楽”となる」

まさしくこれだった。音楽は私に“力”を与える。それはもしかしたら、音から音楽へ変わる瞬間に生まれるパワーのことではないのか。そして、石から“アート”へ

異能の人たち・孤高の陽だまり

渡辺英司「バリエーションズ『豊かな橋』」

美術家/非常勤講師 社本善幸

しろいじめんに

くろいたね

このなぞとくには

べんきょうしなくちゃ (谷川俊太郎 訳)

このマザーグースの謎の答えは、「テキストあるいは眼球」らしい。

では謎を解く為の勉強・scholarとは？……たとえば渡辺英司が白い地面に蒔いた黒い種・言葉は、やがて発芽生長し絡み合ってテキストを書き換えてゆく。

渡辺は場をつくる人だ。あるいは場を架ける人と言っ

愛知大学の旧校舎の中で山本昌男氏の写真作品に再び邂逅す。古い校舎と彼の作品とが織りなす空気感が私を異次元にタイム・スリップさせた。

変わる瞬間。きっとこの瞬間が私に音楽と同じような感覚を与えたのだ。美術のセンスはまるでなく、美術作品など殆ど観たことがなかった私だが、毎日接している音楽との共通点を私なりに見つけることができ、少し嬉しかった。

この直線の最後、林の手前には灰色の石が置いてあった。特別大きいとか、変わった形ではなかったと思う。あえて表すなら、素朴かつどこか威厳のある石だった。しかしその一方で、まだまだその先に続いていきそうな雰囲気漂う石でもあった。まるで、私たちを林の奥のアートの世界へ誘うように。

もしあなたが林の前で立ち止まっているなら、是非その奥に入ってほしい。アートは決して縁遠いものでなく、きっとあなたに“力”を与えてくれるから。



た方が適当かもしれない。それは美術の文脈の中でのインスタレーションとかそういう事ではなく、彼が生得的に持っている人柄のようなものとして……。わたしが見知っている限り彼がそのように紡いできた数々の「場」。今は消え去って記憶の中にのみ在る透明で堅牢

なあ場所を何と呼んだらよいのか？

今回のイベントの立案から実施の最中、わたしはずっと彼に「文脈」についての話をしていたような気がする。それは昨年の震災と無関係ではない。仮に鎮魂画を偽善というなら、逆に心の闇を描く制作もまたマーケティングのひとつだ。現代美術といういかかわしいカテゴリーはもとより美術という形式自体さえ流されてしまったかもしれない今、それらは虚しい議論だ。そのとき渡辺が、「アートどころか人工物・自然物という対立概念すらまやかすだけ」と言っていたコトバが心に沁みる。

ライフレビューアート

杉山健司 & 浅田泰子展の新しい地平

「Who is Inside? - わたしは誰ですか -」

美術批評・NPO法人愛知アート・コレクティブ
鈴木敏春

息子さんの勉強ノートの上に1日1枚、日記のように描いていく浅田泰子さんと、人の「見る」「見られる」という行為を視覚化してきた杉山健司さんによる共作。今回は「わたしは誰ですか」というテーマで、展示が示している人物「私」は誰なのかを楽しみながら見る作品になっている。

夫妻の展示会に初めて接したのは2006年に名古屋市市政資料館で開催された自主企画展で、杉山健司・浅田泰子夫妻と息子と愛犬「ソルト」による家族展であった。当初、この企画展は「家族論」の新しいアートとしての形だと思っていた。地域応援誌「そう」にこのことは書いたが、今回の展示会は違って見えた。

東日本大震災で被災した人々が瓦礫の中から持ち帰ったものは家族写真であったことは記憶に新しい。記憶は、記銘(書き込み)、保持、そして再生の三つの過程からなるという。記憶は、脳の内にある種の変化、記憶痕跡を残すと考えられている。家族写真はその記憶痕跡のかたちといえる。さらに記憶は、短期記憶と長期記憶の二つの段階に分かれている。今回の企画展では一つの話

それが音楽であっても絵画であっても現代アートでも構わない。聴くことで、眺めることで、触れることで、生きていくことに力を与えてくれるなら。

あなたの心は何に揺さぶられるのですか。

「もしあなたが林の前で立ち止まっているのなら、是非その奥に入ってほしい。アートは決して縁遠いものでなく、きっとあなたに“力”を与えてくれるから」小坂日菜子さんの言葉が背中を押してくれる。

(風伯編集部)

わたしは今回彼が見せてくれたいくつかの展開の中で、丸栄でのバリエーションズこそが真骨頂ではなかったかと思っている。その撤去の日、昼下がりの暖かな日差しの中で、ふとわたしの脳裏に浮かぶ言葉があった。「家庭」だ。「美術」という言葉と同様に明治維新以後登場した翻訳語であり、内村鑑三による造語とも言われるその言葉。未だ定着していない感のある曖昧な言葉は場所を指すものだろうか？ ひょっとすると家族という概念とは無関係に存在しうるのではないかとさえ思わせるその陽だまりのような「場」を彼は紡いでいるのか？



がベースとなっている。長期記憶としての息子さんの勉強ノートである。浅田泰子さんは勉強した息子さんのノートにキャラクターを描く。作品はアクリル絵の具と水性ボールペンで描かれている。これらの作品は記憶の書き込み、展示という保持、再生を証明している。杉山健司さんの作品は、そのキャラクターを制作して展示を行ない、表のウィンドウの中に並べて展示した。また従来から人間の興味や好奇心を視線の向こう側に、見ることを基本にした別世界を、箱の中に再現する。ここではミュージアムの在り方を問うている。目玉男のような奇異な形も、箱の中ということで疎外された異文化としての、意味の文化をかたちづくる。箱の中の覗き込む作品にシナプスのような記憶の痕跡を語る役割を担わせているかのようだ。二人の作品から見えるのはアートがケアになる日でもある。

ファーストペンギン

「現代美術展inとよはし」キュレーター
大野俊治（豊橋市美術博物館主任学芸員）

いつものように通勤のため車を走らせていると、何気なく聴いていたFMラジオからペンギンの習性に関する情報が流れてきた。

地面に穴を見つけると、ペンギンたちは集団でやってきてその周りを取り囲むが、とりたてて何もしない。安全なのか危険なのか、様子を伺っているのだ。やがて1羽のペンギンが、意を決したように穴の中へ飛び込む。しかし、他のペンギンたちは動かない。もし穴から血まみれのペンギンが浮いてきたら、素知らぬ顔で別の場所へ移動する。エサをくわえたペンギンが出てきたら、みんな一斉にその穴に飛び込むのだそうだ。

最初に飛び込んだ勇氣あるペンギンのことを「ファーストペンギン」といい、未知の事業に取り組む勇敢な人物を称賛するときに使うらしい。初めに飛び込んだペンギンの心境はわからないが、怖いもの知らずの無鉄砲か、周りに煽てられて乗ってしまうお調子者なのか……。石橋を叩いても渡らない慎重で手堅い三河人の気質を思い浮かべて失笑したが、苦難を承知で「現代美術展inとよはし」のキュレーターを「なんとかなさ」と引き受けた私は、やはり無鉄砲でお調子者の「ファーストペンギン」だったのだろうか？

今回、豊橋初のアートイベントには、10組11名の作

家を招聘した。キャッチフレーズは「トケコマン？トケコミン！」。ジャンルを超えてクリエイティブな創作活動を展開するアーティストを選び、「豊橋」とコラボしてもらった。

つまり、「まちなか」（広場・公園・古建築・デパート・ホール・ギャラリーなど）にオブジェや装置（音響・光学機器・ロボットなど）を置き、作家の意思によって空間を構成することで、日常が非日常に変化し、特定の場や空間全体が溶けあい一体化した一つの作品（＝インスタレーション）となった。

空間全体が作品であるため、鑑賞者は個々の作品を「鑑賞」というより、作品に全身を包まれ「体験」することになる。鑑賞者がその空間に身を置いて五感を使って体験するため、その反応は千差万別、一様ではない。鑑賞者がそれぞれのアンテナ（感性）で受け止め、実に様々な反応が返ってきた。「現代美術展inとよはし」の開催で、現代美術（＝コンテンポラリーアート）は難解でわかりにくいという一般的な認識は、かなり払拭できたのではないかと思う。

それにしても、ぽっかりと空いた謎の穴に、これから一体何羽のペンギンが飛び込むのだろう。



1



2



3

1 タン・ルイ
「Bobby and I in TOYOHASHI」

2 杉森順子
「Tempus Fugit
-時は飛ぶように速く-」

3 村田弘志
「タヴィンチ・ドーム」

4 澤田榮三
「OPEN GARDEN -野菜の饗宴-」

5 石川 理「音の杜 -MORI-」
〈関連イベント〉
ログドラム・アンサンブル・リズムワークショップ
講師：加藤調子（パーカッションリスト）



4



5

友の会の皆様に感謝！

豊橋市二川宿本陣資料館長 後藤清司
(前美術博物館長)

この度、定年により美術博物館を退職いたしました。振り返ってみますと38年の市役所人生の中で、33年という長い期間を美術博物館で過ごさせていただきました。

その中で、友の会の皆様とは友の会が昭和62年8月に設置されて以来、25年間にわたって総会・展覧会鑑賞会・講座・研修旅行・コンサートなど多くの行事に参加し、喜びや感動を共有させていただきました。これらの経験は、自分の人生の中でかけがえのない宝物として胸にしまっておりあります。

在職中の仕事に関して言えば、平成13年度に作成した『美術博物館整備等基本計画』に基づいた整備事業が財政状況の厳しい中で先送りとなったことが残念であり、友の会の皆様に期待から一転して落胆をさせたことに申し訳ない気持ちでいっぱいです。ただ平成24年度においては、美術博物館整備事業の中でも

緊急課題でありました収蔵庫と常設展示室の基本設計費用が予算化され、新たなスタートの年になると期待をしております。

会員の皆様におかれましては引き続き美術博物館をバックアップしていただき、より親しまれ、多くの方に利用していただく施設となるよう応援をお願いします。

なお、4月からは二川宿本陣資料館に勤務しております。ここは、友の会の会員証で入館できますので是非お立ち寄りいただきたいと思います。

最後になりましたが、本当にお世話になりました。ありがとうございました。



副館長兼事務長就任ごあいさつ

豊橋市美術博物館副館長兼事務長 三世善徳

このたび4月1日付けで副館長兼事務長を拝命しました三世善徳(みつよ・よしのり)です。微力ではありますがより魅力ある美術博物館となるよう努めてまいりますので、前館長同様ご指導・ご協力を賜わりますようお願い申し上げます。

金原宏行特任館長には、再び館長にご就任いただき引き続き展覧会・資料収集についてご尽力いただくこととなりました。

美術博物館には昭和60年から平成2年までの6年間勤務しており、庶務や一般展を担当しながら二川宿本陣資料館開館に向けての業務をおこなっていましたが、発足当初の友の会研修旅行に会員の皆様と出かけたことが懐かしく思い出されます。

平成3年二川宿本陣資料館開館後は同館学芸員として、「東海道五十三次」、「広重の浮世絵」、「古文書」、「古地図」、「絵葉書」など主に歴史分野の展覧会や、「大名

行列」や「ひなまつり」などのイベントを開催してまいりました。

今回、21年ぶりに美術博物館勤務となり、多くのことを学んでいる最中ではありますが、東三河を代表する文化芸術施設として、より良い展覧会・講座等を開催することはもちろん、来館いただいた皆様に快適にすごしていただける施設となるよう心がけていきたいと思っております。

また平成24年度は、懸案であった収蔵庫等増築の第一歩を進める年でもあります。美術博物館を最も身近で見ていただいている友の会の皆様に今まで以上の応援ご声援をお願い申し上げます。



こんにちは よろしく!

4月から新しく美術博物館と二川宿本陣資料館に仲間入りしたメンバーを紹介します。



美術博物館管理グループ

- ①氏名・出身 / 寺田昌泰(てらだまさやす) 愛知県田原市
- ②趣味 / 読書、旅行
- ③好きな芸術家等 / 依屋宗達
- ④友の会へ一言 / 皆様がより美術博物館を身近に感じ、より一層満足していただけるよう努めていきます。



二川宿本陣資料館グループ

- ①氏名・出身 / 久住祐一郎(くすみゆういちろう) 新潟県新潟市
- ②趣味 / 古文書解説、サッカー観戦、合唱
- ③好きな芸術家等 / 斎藤真一
- ④友の会へ一言 / 2年間嘱託員として美術博物館でお世話になりました。今年度から職員として新たに二川宿本陣資料館に配属となりました。心機一転頑張りますので、これからもよろしくお願ひします。



美術博物館美術・歴史グループ嘱託員

- ①氏名・出身 / 鶴田知大(つるたともひろ) 愛知県岡崎市
- ②趣味 / オートバイ、旅
- ③好きな芸術家等 / 展覧会に行くたび、様々な作品に驚いています。
- ④友の会へ一言 / 文献資料から新たな豊橋の魅力を発信できればと思います。よろしくお願ひします。

〈その他異動〉金原宏行(美術博物館特任館長→美術博物館館長)、市川奈保子(美術博物館管理グループ→契約検査課)

総会のお知らせ

平成24年度の総会を下記により開催します。お気軽におでかけください。

日時◎平成24年5月12日(土) 午後1時30分～ 場所◎豊橋市美術博物館 講義室

〈記念講演〉午後2時00分頃～

講師=鈴木敏春(美術評論家)、社本善幸(美術家)、大野俊治(豊橋市美術博物館主任学芸員)による鼎談
テーマ=「現代美術展 in とよはし」をめぐって

24年度の会員継続手続きをお願いします

継続手続きはもうお済みですか？

今年もみなさんに楽しい企画をお届けしたいと思っています。

下記のいずれかにより会費をお納めください。

◎美術博物館窓口 ◎郵便局 ※払込票をご利用ください。

◎銀行 ※下記口座へお振込みください。

三菱東京UFJ銀行 豊橋支店 普通 4806768

豊橋市美術博物館友の会



(24年度会員証)

収蔵品紹介

[経筒]

伴成恒●TOMONO.Naritsune

12世紀代(平安末期) 鋳銅製 高さ22.8cm×口径10.8cm
平成23年度購入

本資料は、12世紀代(平安末期)の鋳造製の銅経筒の身部で、口縁部近くの一箇所に後世、茶道具にするための釣手が付けられている。蓋は失われているが、身部全体に、陰刻により銘文が彫られている。法量は、高さ22.8cm、口径10.8cmである。底板には古鏡が使われており、同じく12世紀代のものと思われる。

銘文は、18行にわたり、約170字(欠字を含む)に及ぶ長文である。内容は、久寿2年(1155)に如法経六十六部のうち、第十三部を参河国分として納経したことが書かれており、納経にあたって古い塚を掘ったところ、瑪瑙軸の巻物を掘り出したくだりが書かれている。納経した場所の大檀那の名前が書かれているようだが、この部分は磨かれて判読不明になっている。

続いて全国を納経して回っている勤進聖人について書かれており、銅経筒の作者である伴成恒と、参河国衙の役人の可能性が考えられる藤原貞方、同真直の名が見られ、最後にこの納経を行ったものの代表と考えられる覚念という名前が記されている。

本資料の作者である伴成恒は、雲谷町普門寺から出土し、国重要有形文化財に指定されている普門寺の経筒(普門寺蔵)の陽鑄銘文に記されている経筒の作者と同一である。普門寺の江戸時代後期の什物帳(寺院の所有する宝物、道具などを記した帳簿)には、久寿2



年の経筒が記されており、江戸時代後期には、すでに掘り出され普門寺に所蔵されていたものである可能性が推定できる。

(豊橋市美術博物館学芸専門員 費元洋)

*「新」収蔵品展[歴史](5/12~6/17)にて初公開

編集後記

現代アートを紹介する大規模な企画“現代美術inとよはし”が開催されました。市内10箇所の異なる空間で、ガラス、写真、木彫、映像など様々なジャンルのアートに触れる絶好の機会でした。駅前広場の、座ることの出来るソラマメやナスの椅子。愛大の会場では、図鑑から切り抜いた、夥しい数の蝶たちが天井を舞う作品など、現代美術を、親しみやすく楽しく見ることの出来る作品に出会えました。

しかし、周りではこの催し自体を知らなかった、との声も聞かれました。このような企画を多くの方に知っていただくPRの方法は？企画に市民が参画することでさらに盛り上がりませんか？など課題も残したけれど、初めての企画としては、今後に繋ぐ第一歩となったのではないのでしょうか。

(鈴木冷子)

【表紙作品】

中村正義 1924-1977

〈男〉紙・墨・着彩 昭和51年(1976) 66.3cm×33.8cm

豊橋市美術博物館蔵(昭和57年度 中村あや氏寄贈)

*「新」収蔵品展[美術](~6/17)にて公開中。

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第82号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 宮田正人

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 神野能生子 福島陽子 鈴木冷子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成24年3月31日発行